

日本短篇文学全集 6

坪内逍遙

尾崎紅葉

泉鏡花

広津柳浪



短篇文学全集 6

逍遙
紅葉
花
柳浪



責任編集 臼井吉見

筑摩書房

日本短篇文学全集 第6卷

昭和45年7月10日第一刷発行

著者 坪内逍遙
尾崎紅葉
泉鏡花
広津柳浪

発行者 竹之内静雄

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8

郵便番号 101-91

電話 東京(291)7651

振替 東京4123

製版・明和印刷

印刷・多田印刷

製本・鈴木製本

定価 360円

(分類) 0393 (製品) 10506 (出版社) 4604

目次

坪内逍遙

細君

尾崎紅葉

巴波川

拈華微笑

心の闇

泉鏡花

藥草取

..... 三

..... 三

..... 三

..... 六

..... 三

眉かくしの靈……………一五〇

広津柳浪

雨……………一九一

黒蜩蛭……………三六

鑑賞(村松定孝)……………二六

装幀 枳折久美子

坪内逍遙

坪内逍遙 (一八九一—一九五)

安政六年五月美濃国加茂郡(現美濃加茂市)に生まれた。幼少より江戸戯作文学と歌舞伎に親しんだ。東大政経学科卒業、東京専門学校講師となりシェイクスピア、スコットを政治小説風に翻訳した。明治十八年「当世書生氣質」を書き、「小説神髓」で写実主義を提唱、演劇革新運動に尽力、「桐一葉」などの戯曲を書き、「シェイクスピア全集」を完訳した。昭和十年病没。七十余年の生涯を多方面に活躍し、わが国近代文学の始祖となった。「逍遙選集」十五巻が春陽堂から出されている。

細君

一 小間使と細君

引窓を引いて後は、昏くらき四方より掩おほいかかり、ランプの影は台所の天井に月の形を写したり。秋の日はとツぷり暮れて柱に掛かる時計の音耳につくほど鳴ひゞく。きょうもあるじはまだ役所より帰り来ままさず、離れ座敷の女隠居と縁者みよりと聞きし十七八の娘は近い所の寄席よせへ行き、頬の赤い女中も買物をとゝのえに外へ出でぬ。奥も台所も寂ひそとして、別わかけて新参ものゝ手持なき、お園は独ひとりツクネンと女中部屋に物思い。この時ずかゝと出で来るはこの邸にいる書生なるべし、長火鉢のそばへ突立ち湯呑と鉄瓶を左右にとりあげ、二三度おっかけて白湯さゆを飲み、

こちらへは見向きもせず、疊を蹴立てゝ帰り行くを、お園は目を丸くして見送れり。跡あとはまた一倍の寂しさ。耳に附くは障子越しに板の間をかけまわるいたずらもの。お園は怵こらえかねて立上り、障子を開けて叱しつ々と逐おえば、膳棚ぜんだなへにげこみてキチ／＼と笑う。膳棚を襲えば梁はりを走り、梁をおさえば姿をかくし、障子を閉めて座に戻れば、またいつの間にか憎い物音。逐おいくたびれては起ちもせず、しよんぼりとして吐息をつき、何を思ひだしてか、シク／＼と泣居たり。

「どうかしたのかえ。」と思がけない優しい声に、娘はハツと心づき、見上ぐる目の中に湛たえし涙をまだ押ぬぐうひまもなし。知らぬ間に奥より来りしは束髪に結いし夫人、お園の顔をつく／＼見て、「誰も居ないから淋しかろう。聞たい事もある奥へ。」といいさし、台所を見廻して先にたつて戻り行く。娘は急に泣顔を直し、おそる／＼跡あとにつき、台所の

次の間を通り、闕のそばへ坐りしが、何となく改まって、たゞ居住居が気にかゝる。まだきのう来たばかり、兪相をした覚えはなけれど、叱られるのであるまいか。言葉少なで意地わるそう。ニッコリともなさらぬが、もし奥さまの気に入らず、さげられたらばどうしよう。ゴクつぶしと叔母に叱られ、またつらい日を算える事か、と小さき心おちつかず。

「園。」おそのはびつくりして、「ハイ。」「こちらへおはいり、と言え。」「ハイ。」「宅も大勢だから、さだめし骨が折れるであらう。辛抱ができそうかえ。」と言われる事はやさしけれど、気味のわるい淋しい調子。娘はなお塵をひねり、「どういたしまして。」と言う心を半分口の中で答うれば、「悲しそうに見えたが、どうかおしか。気分でもわるいのなら、何か薬でもあげようか。」と前よりも一しおやさしい問い。母に死別れてから、この一二年、悲しさかつ

らさどに埋められ、毎日のように泣いては居たれど、まだ一たびもこのような情け深い言葉に出合わざりしお園は、総身に染む嬉しさ。「有がとうござりますが、どこもわるくは有ませぬ。」と言果て、心の中にこのような情け深いお人を、意地のわるそうなど思つたは、あれはきつと見ちがいであるうと思ひ、見直す心にて貌を上げ、今煙草盆をひきよせる夫人の顔をじつと見る。

年は二十五六、中背にて姿はよけれど、瘦がたと言うよりは瘦すぎという爪はずれ。貌はやつれて色は青白く、頬高く見えて目は少し凹み、眉も生際もいと薄く、不人相というではなけれど、愛嬌は微塵もない、どこかにありそうなど探しても、眼尻は少し釣上り、小さい口元は緊くしまり、額の上の青筋のみたゞありくと目について、どう見直しても、意地わるそう、不気味な、陰気な、勢いのない。あゝ、大かた御病身の奥さまであらう、お気の毒な、

とお園は思いぬ。

「宅もモウひとり小間使がいましたが、訳があつて下げたので、当分は忙しかろう。年は十四だと言つたっけネ。それにしては体が大きい」といいかけて、お園を見つめ、「おツかさんは有るの。」「ござりません。」「おとツさんは。」

お園は少し鼻をつまらせ、「おとツさんもござりませぬ。」と言いつゝ、怵えかねてうつむき、膝の上へ翻す涙。夫人は流し目に見やり、「それではお前はみなし子というのだネ。誰がお前の世話をするの。」「叔母さんが。」「可愛がつてくれるのかえ。」

小間使はたゆたえり。正直な子供心に嘘はいわれず、何と言おうと考えれば、その返辞を超越してもう喉までも沸出る悲しき。泣くまいと思えど、怵えきれず、悲しくなつてうつむけば、夫人は長煙管をせずかにはたき、しばしの間言葉なし。二三分過ぎて煙管を置き、「ほかに力になる人はないの。」「何

にもござりませぬ。」

お園はきたない襦袢の袖を下よりひきだし、顔をそむけて目を拭いぬ。上に着た双子の衾の小綺麗なるも哀なり。

「今まではどういふ所にいたの。邸へ奉公した事があるかい。」「イ、エ、お邸はぞんじません。たつた一度下宿屋へ」と言かけて、また曇り声。「その下宿屋というのは、どのような家。旦那と内儀さんと、お客は大ぜいな。」「お客さまが通し十人位いござりまして、間の数が七間、そして女中はわたくし一個。」と言い滑らして噤む口。夫人は別に気もつかず、「お内儀さんはいくつぐらい。え、二十六。そしてほかに女中はなしで、お前とたつた二人きりよくマアそれで大ぜいのお客の世話ができたもの。気苦労がなければこそ。」と自身に語るように吐息つく。聴きひがめて、こなたは真面目。「気楽どころではござりませぬ。それはくむずかしいお内儀

さんでござりました。旦那は養子でござりますので、何事もお内儀さん任せ。それですからお内儀さんは我儘なことばかり言つて、少しでも気に入らぬと、八釜しい口小言。殴いたり、捻ったり、朝は五時ごろから、夜は早い時が一時ごろまで、坐っている間はないくらい。煮たきから拭掃除、三度のお給仕、書生さんの使いあるき、取次も洗濯も私したったひとり。つらいことでござりました。」と包まず言うも蔭言ならず。裏表なき子供なり。

もとこの少女は、自身にも言いし通り、頼りなき孤子なり。十二の年より叔母に養われ、十三の年奉公に遣られ、四季折々の着物さえ人並には着せられず、給料はすべて叔母の餌食。されど叔母はまだあかず、ゴクつぶしと罵りぬ。小間使としては愛くるしき貌だちも、光彩門に生ぜねば、叔母の心には不足なり。左の腕の黒痣の天然ならぬを見るものは、この二三年の艱難を思いやり、この子の境界を不便

がれど、障らぬ神に祟りなしとて、進んで引とろうというものはなし。浮世に鬼はなけれど、浮世に神もなし。下宿屋の女房とても一通りの人間なれど、大まい五十銭の給料を役に立たずにやる法なければ、役に立たせんとして責め使うも、つまり嫁入の下修行、当人のためを思うての事、誰が憎まれ役を好もうぞ、と女房はいえりとぞ。されどそれにもかゝわらず、叔母は下宿屋の無法を腹立ち、ついに無理やりに、お園をさげ、よそへ奉公をさせようと言ひぬ。お園は思わず涙にくれ、叔母を邪見と思つたは物体なかつたと泣いて喜び、奉公というものはこの位に辛いのが並の事と思つたれど、して見ればそうでもないかと「ゴクつぶし、ごくどう、いつまで叔母に苦勞させる。」と小言の雨のそゞぐ中で、未来を頼もしく思いしが、「それではしかたがない、前借を聴かぬ代り、給料を拾銭ずつ殖そうから、園を元の通り戻して。」と下宿屋から仲裁の談判が来た時には、

お園はまたぎよつとして、叔母の顔を見つめたり。

こうなつてもさすがは肉親、「大事の姪を十錢ばかりで牛馬にはさせられない。お邸へ奉公させます。

お内儀さんへよろしく。」とはねつけた叔母の口上。お園はまた有がた涙にくれ、この時ばかりは叔母の笑つた口附に位があると思ひたり。

さて一月の給料七十錢の約束にて、この邸へ来て見れば、叔母の慈愛をますます知りぬ。下宿屋とはちがう大氣の邸、下宿屋にては「その」となぐるよりに呼つけられしも、「そのや」と和げて称ばるゝさえ、小言に腫れた小耳には春風のように思われぬ。隠居所の用事は、お留という娘が取扱かい、台所の水しわざもお三がたいがいはしてしまふ。小間使の用事は下宿屋の辛さに比ぶれば、何のマアこれが用事。極楽に行けばとてこう安楽ではあるまい。物体ない三度のお惣菜、書生さんの喰いあらし、それで私はたくさん、と言つて悪いか好かろうか、心配は

たゞそれきり。けれど、こんな不束な事で、奥さまや旦那さまのお気に入ろうか。一生こゝに勤めたいと思へど、むずかしそうな奥さま、口へ出しておつしやらぬだけ、気心が分らない。下宿屋のお内儀さんを少し交たら勤めよいに、お邸と云うものは顔で物をいうところか、と苦勞が教えし揣摩推察。十四にはませた娘なり。

小さき胸にかかる浪があるうとは気が附かねど、夫人は始終の履歴を無言にて聴き終り、この時淋しげに、お園を見やり、「それでは十三の年からして、そんなに苦勞をしたのかネエ。道理で体は大きいが、恐ろしく瘦て痛々しい。どこにも辛い事は絶えぬもの。しかしお前はまだ子供、どんな宜いとこへ縁づくかも知れない。よく辛抱をおし。世の中にはまだまだ辛い事があります。」と独言のような意見の言葉。お園は嬉しく頭をさげしが、心の中には解しかねて、これよりも辛い事とはどんな事であろうと思

い、年上の人はどうかするとあんな事ばかり言うけれど、子供だと思つて欺すのではあるまいか、とふらふらと起る疑い。ア、誰がこのような廻り気を教えしぞ。

さるほどに隠居も寄席がはねて、娘と共に帰り来り、夜もはや十二時と深け行きたり。今晚も旦那はお帰りであるまい、締りをしてお寝よとの言附け。

御機嫌よろしくの口儀もすみ、お園は女部屋に退り、赤ら顔の女中と枕を並べぬ。されどいろ／＼の大事が気になつて寝附かれず。あの情け深い奥さまは御病身なのではあるまいか。それにしてお薬をあがる様子もなし。旦那さま、存外に貧相な、と思ひかけて自分で打消し、お丈は高し、大変な学者という事。月給はたくさんお取りなさる。手前はいくつだ十四か。フーム、とおっしゃったことなく位いのある偉そうなお人……お留さん……御隠居さん……お園はしばらく戸籍調べに余念なし。「ア、みんな

善いお人らしい。おさんどんまで優しそうな。どうかして永年勤めたい。ほんとうに情け深そうな奥さま、官員さまはこうも御用が多いものか。きのうもお宿り、きょうもお留守。奥さまはお淋しかろう。オヤもう一時。あのボン／＼は十円もするか。ほんとうに立派なお邸。どうぞここへ勤めたい。」と勤めたいを思い寝に、その夜はあどけなき夢を結びぬ。

翌朝は日曜、ことに主人の留守なれば、人々はまだ起き出でねど、お園は独り甲斐々々しく早く起き出でて立働らく。やさしそうなお三がない／＼つぶやくのは耳に入らず。湯をわかし膳ごしらえをなし、お三が起き出でしころには用事のないに困り果て、「奥庭から裏庭まで限なく掃除に駆まわる。「オ、庭掃除なれば書生がします。手水の水をとつて来て。」と隠居所の縁側から老女の声。「お早うござります。南のお縁側にもう取つて置きました。」「そうかい。感心に気がついた。」と褒められて、お園の

嬉しさ。「ほんとにこのかたも情け深い。」

だんく居慣れて見れば、家中の人々一人として情け深くない人はなし。お留という娘は病身にて口数きかぬ代り、人も善し。「親類ぶつて高ぶらぬがあの田舎者の取得さ。」とお三は言えど、お園は決してそうとは思わず。奥さまと中なかをよくし、隠居さまを大切にし、またよく働らき、情けぶかいと思えり。隠居は元より善人よひひと。たゞお留ばかりを連れて、きょうも物見、あすも芝居、これが少し気に入らねど、奥さまの外出嫌いは持前とやら、さすればこれも隠居さまのせいではあるまじ。長屋に住っている車屋夫婦、これもまた善人。書生も一人あれど、これもまた善人。たゞお三のみは割合に意地わるし。されど小言に慣れし耳はこの女の小言を辛いとは聴かず。姉さまがあらばこうも言うであろうと思ひ、逆らわねば憎まれず。それにこのおさん、人並の性分なり。なまけ根性と慾張根性とを悪魔の持前とな

さば知らず、さなくば決して悪魔にはあらず。それゆえ折々は手助けをされて腹を立ち、エ、小ましやくれたお節介せつかいと口へ出して独語つごやけど、つまりは自分の骨休めとなり、ことに陰の事で奥へは知れず、賞められる時は自分も賞められ、さしたる損もない事ゆえ、果はたいがい「お節介」を、お園にさせて小言もいわず、たゞつまみ食の相伴を承知せぬを怒れども、毎日少しづつ掠かすめるものを、知っていそうなれど言い附けぬを「感心なあの子」の美德とくえと思ひ、日に増し寛大に扱ひぬ。しかしながら正當に評をすれば、こう感心によく働き、見せびらかさぬお園の誠実、よし人間に悪魔ありとも、どのような悪魔かあえてこの娘に辛く当らん。お園は品のない小さき天人にてありしものをや。

かくて二月ばかり立つうちに、家の内の事あら方は、お園の胸に入れり。お邸はこうしたものか知らねど、奥さまと旦那さまの間、疎遠なこと仲のわる

い従兄弟いとこどしのごとし。されど争論いさかひをなさる声も聞えねば、仲の悪いのでは無かるべし。主人は相変らず留守勝ち。たま／＼家に在れば、来客絶ゆることなし。それゆえ五月蠅うるさきか、きようは留守だと言えと言い附けられしこと幾度いくたびもあり。ある時、つい口が滑り、お宅でござりますと客に答えて、羽織を被流きながせし四十格好の男を取次ぎし時には、恐ろしく主人は立腹し、夫人まで傍杖そばづえの小言を貰いぬ。お園は蒼くなりて慄え上りしが、別段の咎めもなかりき。これより、取次をするはお園の大きいなる苦勞の種となれり。またその外にも、お園の心配の元となりし事を言えば、月末の支払い時なり。前の月には十七日に入りの商人あきんどが通をメテ持参かよひしめせしが、今月よりは月末の払いに定めるから、三十日に持って来てと夫人の言い附け。それゆえその月は三十一日にすべての支払いを取次ぎしが、今日もまた暮れて、通い帳が台所うずたかに推く、商人あきんどはお払いをもらいに来れども、奥よ

りはまだお金がさがらず。そのたびに取次をすれば夫人の顔色常よりも一倍わるく、来月一緒にやる、今は少し都合があるとお言い、といつになく慳食けんどんに言われ、お園はなぜに延引するかをまだ疑うに暇いとまあらず、夫人の不興を恐れ、恨めしい米屋、何のためにお勘定を急ぐのだろう、裏長屋ならば知らぬ事、いつでも戴かれるものかと思いたり。とかくしてまた一月を過すうちに、お三はどうした訳にやにわかいとまに暇になり、退りしが、その二三日前より、さんざんに無法な蔭口を言い始め、尋ねもせぬにいろいろの事を言えり。夫人はもと相応な官員の娘にて、師範学校をも卒業せし事、主人が書生上りなりしころ婚禮せし事、そういう女書生だから、台所の事は真暗で、いやに勘定の細かい癖に人を使う呼吸を知らず、目端が少しもきかぬ癖に、おつに世話を焼きたがる事、夫人の母は後妻で、継母継母ははで、気の附かぬウツカリで、一人の碌碌でもなき実子のある事、今は里

かたは落ちぶれて夫人からの仕送りにて、どうにか活計くわしを立つるといふ事、いつたい、旦那は浮気者で、いろ／＼のシヨイコミをして困りながら、その癖きれいに手を切るといふ器用な機転はなく、たべちらかして歩くといふ事、先達ても茶屋女ちやおんなをどうかして五十円手切をとられたといふ事、今も毛色の変つた罍いりいものが有との事、また昔からの借金が嵩かさみ、内輪は立派な火の車、それに老耄おぼれの婆アさまが目も耳も利かぬ癖そとですまに外出好そとですまで、チヨビ／＼と金をつかうので、(芝居といつてもタカが鈍帳位びんちようくらいだアネ、入用は知れたものなれど。)けちんぼのお心よし、お独り御心配なさるといふ事、その外、真まことと思われぬけしからぬ事を聞きしかど、前に挙げたりし箇条をさえ、大かた嘘と思ひこみ、聞きても聞かぬお園の耳には、ほかの話は止とまらざりき。そのうち罍いりい者の一糸だけは幾分かそうかと思ひ当り、奥さまを氣の毒と思ひしが、借金の話は受けとらず。心はそうかと

思つても、経験がそうだとは言いきらず。それほど困つてお出でなさらば、何であのような立派な服を召ていして、手車ていぐるまで毎日駆廻かまつたり、お客さまの有るたびに西洋料理の、仕出しのと御馳走おめしをなされようはずがない。旦那さまの御衣おめし裳しばかりでも簞笥たんすが幾棹いくさお、西洋簞笥が幾棹、お帽子ばかりでも幾つ、お靴ばかりでも幾足、馬車に乗つてお寄なされた華族さまのお客さえあるものを、借金、人を馬鹿にした。旦那さまのお時計、あればかりでも二百円。借金、人を。小間使がこう思ひ込みし信用は、たび／＼払いを催促しながらなお強あながちには迫らぬ出入りの諸商人の口振を聞いていよく堅くなりぬ。同じ催促のようなれど、下宿屋などの場合とは大いに違えり。彼の場合にては借金取のかた手強あなかりしが、此邸こににては反対なり。これは借金でなき故ゆゑと、お園は思えり。一二日過ぎたれど、女中の代りまだできず。おとめはこの頃より或る重い病にかゝり、枕も上らね

ば手がかゝり、車屋の妻が台所の使い歩きを手伝えども、お園の忙しさ限りなし。されども悪い顔もせぬ甲斐々々しさを、口では褒めぬど朝も夕も、台所を擗がけにて働く夫人の情けをば、深い内井戸の水と一緒に斟んで知るお園は、これよりまた一層夫人を慕い敬いぬ。

ある朝よう／＼慶庵より女中の代りを連れ来れり。ともかくも目見えに居よとてその女を止め置き、まづ主立し出入りの店を一々教えて置くがよいと、お園は主人に言い附けられ、九時過ぎに立出ずる時、門外にて五十近い羽織被た見なれぬ婦人と行きちがい、その人の邸へ入るのを見て、何者だろうと思ひながら、新参の女と共にそのまゝ所々を繞り歩き、出入りをも大かた教えし後、女中を慶庵に残し置き、自身は先へ帰りしが、存外ひまどりて時刻はすでに十時を過ぎたり。奥には客のある体ゆえわざと控えて水仕事、昼の用意にかゝりしが、ふと聴く事ので

きしゆえ斟酌しても子供気に、ずかずか奥へ近づきしが、夫人の居間には老女の声この時少し高くなり、「イ、エ、何のお前、どうもこうも思やアしません。どのようなよい方でも、暮となれば物入りは多いならい。いったいわたしが料簡ちがひ。子に甘いから起つた事。イ、エ、腹を立つ訳はないのさ。」という声を聞きかけて、様子は知らねど忍び足、今顔出しては悪かろうと、お園は台所へ戻りしが、何の話かまだ分らず。お居間へのお客といい、奥さまへのあの口振り、さてはお里のお袋さま、と察してもまだ分からず。されど深くは気に掛けず、惣菜の煮焼膳ごしらえ、忙しそうに駆けまわる。

いつの間に老女は帰りしか、夫人は、お園の後ろに立ち、「客があつて手伝わなんだ。慶庵から来たのはまだ帰らないの。」と言う顔を見上ぐれば、常より悪い血色。氣は付きながら咎めもならず。新参の女は慶庵へ立寄り、いずれお昼前に参るとの事、